

# 津田に 伝わる 猫の タマ

昭和六十三年四月五日号

昔、津田村に裕福な一軒の旧家がありました。しかし、この家は仕事の失敗で、だんだん暮らしが苦しくなり、とうとう雨漏りのするあばら家になってしまいました。その上、主人が病気で、稼ぐこともできません。

その家に、ずっと前からタマという一匹の猫が飼われていました。主人は田田、少ない御飯をタマと分けあつて食べていました。

ある日、夕飯を食べた後、寝るころになつて、

「タマや、もう寝ることじょうじょう」と言つて、タマを捜しましたが姿が見えません。どこかへ遊びに行ったのだらうと思つて、

主人は寢てしまいました。

翌朝、主人がまくら元をふと見ると、お金がお置いてあります。数えると八文です。

「おや？こんなはずはない。確かに何にも置かなかつたはずだ」

と、わけがわかりません。でも、主人にしてみれば八文というのは大金です。へきつと神様が恵んでくれたんだらうと神棚を拜んで、お金をいただくことにしました。

その次の朝も、まくら元にお金がお置いてあります。次の朝も、その次の朝も……。不思議に思つた主人は、夕飯を食べて外へ出かけるタマを、そつとつけてみました。そんなこ

ことは知らないタマは、河原へ出て、あたりを見回してから、川の中に生えている青い藻を前足で取っては頭につけます。それを何度も繰り返し、タマは目の不自由な人の姿になりました。

「そうだったのか。タマが盲人の姿になって、人からお金を恵んでもらっていたのか」

と思うと、涙がほおを伝わりました。ある晩、主人は、

「タマよ、おまえにまで苦勞をかけてすまない。でも、私も体が丈夫になつて、働けるようになったからもうやめてくれ」

と言いました。次の日、タマはどこかへ姿を消したということです。

